

# ユニフォーム着用が集団における個人パフォーマンスに与える影響

## —ユニフォーム着用による「連帯感」向上という視点から—

諸頭 尚人

「集団が自発的に、あるいは規範として設定した、全員で同じ服を着るにあたっての同一デザインの服」と定義されたユニフォームは様々な用途で着用されるが、その中でも特に「連帯感」を通して集団内の個人パフォーマンスを上昇させるという効果が注目されている。しかし、ユニフォームと連帯感、連帯感とパフォーマンスという研究はあるものの、ユニフォームの連帯感醸成から生じるパフォーマンス向上という想定全体を仮定して研究を行ったものは少ない。そこで、本研究ではユニフォームの着用と集団内での個人パフォーマンスの関係を、「連帯感」という概念に着目して探索的に検討することを目的に実験を行った。また、仮説としてはユニフォームの着用によって連帯感想定尺度が上昇するという仮説 1、そしてその仮説 1 が支持されたうえで、連帯感とは集団凝集性のことであり、集団内の個人パフォーマンスが上昇するという仮説 2、または連帯感とは内集団の同質性のことであり、集団内の個人パフォーマンスは同質性の可視化、および内集団の極性化によって低下するという仮説 3 を立てた。

本研究では、連帯感を集団凝集性および内集団同質性、パフォーマンスをグループディスカッション課題における個人のアイデア量およびアイデアの質という定義を行い、実験を行った。実験はユニフォーム着用群と非着用群に個人でのアイデア出し、およびグループディスカッションによるアイデア出しを行わせるものであった。得られたデータから、ユニフォーム着用群と非着用群との間で連帯感想定尺度および量的・質的パフォーマンスに有意な差が見られるかどうかを検討した。

その結果、社会感情測度および内集団同質性認知について、ユニフォーム着用群よりも非着用群の方が有意に高く、また社会感情測度とブレインストーミング条件での課題評定平均に弱い負の相関、同質性認知とブレインストーミング条件でのアイデア数に弱い正の相関が見られた。また、ブレインストーミング条件での課題評定平均の分散についてユニフォーム着用群と非着用群の間に有意な差が見られた。

まず、ユニフォーム着用群よりも非着用群のほうが社会感情測度および同質性認知が高く仮説 1 が棄却されたことについては、ユニフォームがその着用に至る経緯の違いで機能が異なること、そして一時的集団にユニフォームを強制的に着用させた場合、かえって連帯感が低下するというユニフォームの逆機能の存在が示唆された。また、連帯感想定尺度とパフォーマンスとの間に相関が見られたことについては、社会感情測度と課題評定平均については「外集団ひいき」、そして内集団同質性認知と課題得点については同質性と同質性認知の性質の相異から先行研究との食い違いを説明できると考えた。また、ユニフォーム着用群と非着用群との間で以上のような相関関係の見られかたが違うにも関わらずユニフォームとパフォーマンス間の関係性が見られなかったことから、ユニフォームが本来存在する連帯感尺度とパフォーマンスとの関係を強めたり弱めたりしているという、新たなモデルの存在の可能性も推測された。

したがって本研究の結果から、従来の想定通りのユニフォームの効果は見られなかったものの、ユニフォームの逆機能の存在、そして新たなユニフォーム機能のモデルの推測が得られたと結論付けられた。しかし本研究は新奇性ゆえに様々な問題点や改善点が存在しており、本研究で得られた知見および改善点からさらなる追試、もしくは新しい実験デザインでの研究によるさらなる知見の蓄積が求められた。(社会心理学)